

## 利根川流域の集落に関する諸問題

はし が き

昭和四一年夏以来、九学会連合の利根川流域総合研究に参加し、その集落について調べる機会を得た。

上越国境の丹後山（二八〇九米）に源を発し、関東平野を貫流して銚子で太平洋に注ぐ利根川は、幹線流路三三二料、流域面積は本邦第一の一六六八〇平方料、吾妻川、烏川、渡良瀬川、鬼怒川、小貝川など数多くの支流を集め、関東構造盆地の中心部で史上幾多の乱流と河道変遷をみながら今日に至り、関東地方の産業、社会、文化の重要な地理的基盤を形成してきている。その水は現在、農業用水、工業用水、発電、都市用水などに広く利用され、その河道は古くは水運にも利用された。しかしその河道の変遷からも想像されるように、古来屢々、洪水が流域の集落を襲い、その住民は利根川の水と絶えず斗わねばならなかった。流域の開発も集落の盛衰も利根川の流れに関連し、その水との斗いのもとに行われてきたといえるであらう。

利根川流域の集落に関してはすでに、本会の菊地利夫、岡本兼佳、大井武、松尾俊郎、佐藤甚次郎の諸氏や磯崎優

氏らの多くの研究があるが、本稿では以上の先輩諸氏による成果を基礎に、利根川の利用の上に著しい変化をみた明治以後今日にいたる間の集落の変貌を中心に、利根川とその流域集落に関する諸々の問題点について考察してみたと思う。なお九学会連合の総合研究は所属各学会の緊密な連繋のもとに現在なお続行中であり、本調査もしたがって未完である。九学会連合の研究目標からすれば、このような集落の人文地理学的、あるいは歴史地理学的究明が学会の研究のいかに関連し、融合するかが問題となるが、ここでは一応、今までの調査結果を整理し、本流域を中心とするその概観を行い、村落や都市についての問題点を考えるにとどめることにしたい。

### 一、利根川の変貌

利根川流域は山地部約四〇%、平地部約六〇%で、平地部の占める割合の高い点で特色がある。源流より渋川付近にいたる間は山間地を流れ、その流路はほとんど変わらないが、谷幅が漸次広くなり、前橋付近で関東平野の北西隅に流れ出て河床の傾斜が緩くなると共に乱流が始まる。中流部一帯に見られる自然堤防や河跡湖はかつての激しい流路変遷の跡を示し、赤麻、石川、印旛、霞ガ浦などの遊水池や湖沼は洪水調節の役割を果たしてきた。流出する老大な土砂は河床を高め、流域各所に排水不良地を現出した。また下流地帯は常陸風土記のいわゆる「香取海」であったところであり、手賀沼、印旛沼、霞ガ浦、北浦などは香取海の入江であったが、河川の堆積作用と人工的陸化によって低湿水田地帯と化し、今日の下利根平野が出来上った。

関東構造盆地の運動によって、銚子では〇・〇一米の隆起、江戸崎・土浦にかけては沈降地域となっており、かかる構造盆地運動が荒川、利根川をして中流において乱流せしめる基礎を作っている。中流部における流路の変遷に



またそれまで房総半島の荒海を廻って航行していた航路を、銚子から利根川を遡行し、関宿からかつての太日川に通じて掘られた新川を通して江戸川を下り、容易に江戸に達するようにする、などのためにとられた方策であった。このような伊奈氏によるいわゆる関東流治水法によって河道が付け替えられた後、近世中期頃から紀州藩士井沢為永の方策によって紀州流が採られ、河道を真直にして堤を堅牢且つ高大に築き、遊水池の湖沼や流作地を水田とし、下流の低湿地を水田化した。しかしこのために新しい河道の流域一帯は、河床の上昇に伴ない、屢々水害をうけることになった。

利根川流域の年降水量は大体二二〇〇ミリから一七〇〇ミリくらい、とくに八、九月の台風期に多い。洪水は八〇%以上が台風によるものであり、とくに台風によって前線が刺激された場合に起り易い。江戸時代の洪水としては天明六年（一七八六）の大洪水が有名で、権現堂堤の破堤によって水は江戸にまで及んだ。天明三年の浅間山噴火による降灰が、利根川の河床を高めた結果であるといわれている。明治四三年の洪水も著名で、山王堂、中之条、権現堂などの破堤で氾濫面積は一八万町歩に達した。昭和に入ってから昭和一〇年九月、そして昭和二二年九月一五日のカスリン台風による洪水がある。とくにカスリン台風による洪水の時は栗橋水位標は九・一七米に達し、埼玉県北埼玉郡大利根村地先で右岸堤三三八米の破堤をみ、水は東京東部に達し、耕地冠水面積八〇、〇〇〇町歩、東京では死者六名、負傷者三名、行方不明一名、浸水は一〇三、八七二戸に達した<sup>⑧</sup>。

明治に入り、内務省は明治八年以降三二年までに低水工事を行った。これは主に水運のために施行し、ファン・ドールンやムルデルなどのオランダの技術者によって指導された。当時は鉄道が未だ発達せず、内陸の輸送はほとんど河川によって行われ、利根川は淀川に次いで物資輸送路として重要な役割を果たしていたのであった。しかしその工事

中、明治一八年、二三年、二九年等の洪水があり、明治三三年度より高水防禦工事に転換した。そしてその後は洪水の度に計画高水流量は改定され、改修計画は増補された。かくて全川にわたり掘削、浚渫をし、堤防の嵩上げを行ない、一部に引堤し河状の整正を行なった。以上のような明治以降の数次に亘る治水工事によって、利根川はその相貌を全面的に変えるにいたった。すなわち曲流は直流に改められ、川幅は拡げられ、堤防は高大となり、渡良瀬遊水池は調節池化され、本川、支川の上流には多くの多目的ダムが構築された。

利根川は古くから農業用水に広く利用されてきており、古くは慶長九年（一六〇四）に伊奈備前守忠次によって築造された備前渠をはじめとし、万治三年（一六六〇）以降伊奈忠克によって開さくされた葛西用水、享保一三年（一七二八）井沢弥惣兵衛によって開かれた見沼代用水、あるいは古海から引水して邑楽郡下流を灌漑するために天保一〇年（一八三九）名主白石弥五左衛門によって計画され着工された利根加用水など、その他左岸右岸に幾多の用水路が開かれて、流域の農村を潤してきた。第二次大戦後にいたり、利根特定地域総合開発計画のもとに新しい用水が開かれて、農業用水のみならず工業用水、都市用水にも利用されている。

また、利根川の利用に関して重要な意義をもつものに水運がある。河道の付け替えは利根川の経済的価値を著しく高めることになった。鎌倉に幕府が置かれていた頃は鎌倉が政治の中心であり、交通系はいわゆる鎌倉街道によって鎌倉に集中していたが、江戸開府以後は交通系は一変し、五街道をはじめとする江戸中心の諸街道が整備されて宿駅伝馬の制が定められ、利根川、江戸川、荒川などの諸河川の水運が開かれた。奥羽地方からの廻米を安全に行うためにも、房総沖の荒海を避けて利根川新水系の利用が要求され、銚子で川船に積換えて潮来出島を経て関宿に至り、それより江戸川を通り、小名木川の水運を経て、江戸の本所・深川へと運ばれた。内陸水路網は利根川本流―江戸川を

幹線とし、烏川、渡良瀬川、巴波川、鬼怒川、小貝川、霞ガ浦などを支線とし、さらに旧河道や前記の用水までもが利用され、江戸の人口増大と共にさかんに輸送された。輸送物資の大宗は天領からの年貢米などを中心とする江戸への廻米であり、利根川上流、秩父盆地、関東山地などの物産、さらに信州、越後方面からも積み出された。利根川下流からは魚や魚油も運ばれたが、その帰り荷の主なものには肥料や塩であった。船は主に高瀬船が用いられたが、上流の浅いところや水の涸れた時には小型の舳舟が使われた。普通は貨客混載だが、とくに客を主とするものは行船、成田船、屋方船と呼ばれるものであった。大型の高瀬船すなわち元船の可航水路は、水量と流路の傾斜による水勢によって変化するが、遡行終点は上流の五料、山王堂、平塚、中瀬等であり、水の少い冬季は下流に終点をもち、載貨数量も夏は多く冬は少かった<sup>④</sup>。かくて本流、支流の沿岸には、物資集散の中心として多くの河岸場の発生をみることもなった。その開設は江戸廻米や諸城下町の物資輸送のためであり、常に領主の保護のもとに設けられた。その場所は、主要街道との交叉点や二河川の合流点などが多く、河岸場にはいくつかの川船問屋ができた。そして通行船舶の取締りに要所に関所が設けられたが、とくに全船舶が必ず經由する関宿が重視され、元栗橋には船改番所が置かれた。

利根川の水運は明治に入ってからも続いたが、明治二三年には利根運河が開かれ、東京への高瀬船はこの運河を利用し、関宿經由の船は見られなくなった。従来の高瀬船に加えて新しく外輪蒸気船が登場し、流域と東京間に運航した。しかし明治一六年に高崎線、同一八年に東北線、同三一年に常磐線、同三四年には成田線、同三〇年には総武線、そして昭和六年に東武鉄道が開通し、さらに道路が整備されてトラックやバス網が発達すると、利根川の水運は急速に衰え、河岸も衰微し、問屋も没落して、昭和一〇年頃になると川には船はほとんどみられなくなった。

利根川には架橋されていなかったが、少数の船橋と多くの渡船があつて、対岸交通に利用されていた。しかし第二次大戦後にいたり急速に永久橋の架設が進み、渡船は廃止されたところが多く、現在ではほとんどころにみられる程度である。したがつて対岸交通は主にこの永久橋を利用して行われ、京浜地区の都市化、工業化の影響は、鉄道やこの永久橋を通る道路の沿線にみられる。

## 二、利根川流域の集落とその変貌

利根川流域では両毛地方を中心として古墳時代の遺跡が広く分布し、古い時代からの居住地域の形成を偲ぶことができるが、中・下流の低湿地は概して開発がおくれ、江戸時代に入つて漸く干拓が進み、村落が展開することになつた。諸々の用水の開さくも進み水田が開かれていったが、たえず水害に悩まねばならなかつた。したがつて、沿岸の古くからの農業集落は比較的高燥な自然堤防がえらばれてその上に設けられ、中・下流部では沼地の干拓や湿地の改良に多くの努力が捧げられてきている。現在も幸手東南から杉戸方面にかけての後背湿地では低位生産性の掘上げ田地域がみられ、排水による土地改良が進められている。古利根・江戸両川の河間低地においてはその集落は、連続的集村は広大な自然堤上に、列村は微弱な吹上州に、散村は島状微高地の地域にあることが報告<sup>⑤</sup>されている。天正一寛永の頃に開かれたといわれる下利根沿岸の十六島新田も、十六の川中島（自然堤防）の上に設けられたものであつた。低湿地が干拓され耕地化されるとともに、各方面から入植移住が行われて村落がつくられた。下利根平野では常陸の国の人々が進出し開拓して村落を建設した。布鎌新田や印旛沼の逆デルタの埜原新田は常陸国の新利根川沿岸の人々であつたし、十六島新田は常陸国の江戸崎―潮来の人々であつた<sup>⑥</sup>。中流部の北川辺領でも新田村は周辺の自然

堤防上の古村から夫々微高地を求めて開かれている。古利根・江戸両川の河間デルタでは、河川氾濫に備え、えらぶべき微高地がない場合は自然堤の高まりに更に盛土加工してまで宅地を設けた<sup>⑥</sup>。板倉・明和・北川辺などをはじめとする中流から下流へかけての沿岸の村々や、渡良瀬・鬼怒・小貝下流の沿岸の村々の古い農家には、いわゆる「水塚」が随所にみられ、信濃川下流の水倉、淀川下流の段倉、多摩川下流の倉屋と似た景観を呈している。しかし河川改修工事が進められ、沼地の干拓、低湿地の土地改良、灌漑用水の整備などが行われて、流域の村落は大きく変貌してきている。

利根川流域における都市は江戸との関連のもとに成立し成長してきた。近世においては城下町も、江戸と地方を結ぶ街道や水路沿いの交通便利の土地に、また江戸防衛を考慮して営まれている。しかし概して、水戸(徳川氏)、宇都宮(奥平氏)、館林(榑原氏)などの北関東の大藩の城下町を除き、他は小藩や天領が多く、それだけに小城下町が多く発達した<sup>⑦</sup>。沼田、厩橋(前橋)、足利、伊勢崎、佐野、忍(行田)、古河、野田、関宿、岩槻、佐倉、土浦など。また市場町としては、柏、加須、桐生、倉賀野、渋川、下仁田など、宿場町としては熊谷、守谷、竜ヶ崎、玉村などがある。これらの都市には県庁所在地として発展しているもの、古くからの伝統工業の中心地として存続しているもの、鉄道の沿線で東京の巨大化の影響により急激な都市化が進み、東京の衛星都市として発展しているものなど、さまざまであるが、中には以上の条件から外れて停滞しているものもある。

利根川流域の集落で利根川の利用の変化に伴って最も著しい変貌を示したものに河岸場がある。河川の改修工事と高大な堤防の構築によって、最も繁栄した河岸の部分には堤外へ移転せざるを得なくなった。加えて陸上交通の発達に伴う水運の衰退は、かつて交通集落として発達した河岸場の機能を奪い去ってしまった。関宿は政治的経済的中心の

城下町から、付近の農村の中心集落よりもさびれた一田舎町に衰微し、境、宝珠花、布川などは鉄道の沿線から外れ、バスによってのみ鉄道沿線の都市と結ばれる一田舎町に、そして山王堂、川俣、大越、中田、金江津、野木崎、飯積、赤岩などは、僅かのバス連絡をもつ農村の中心集落に、あるいはたんなる農業集落に変わった。取手、栗橋、木下、神崎などは鉄道の沿線にあるだけに、それなりの都市的機能をもって生き延びたが、利根川を背にし鉄道の駅に向って発達し、集落形態も変わってしまった。かつて繁昌した川船問屋も姿を消し、あるいは移転し、あるいは職業を変えた。しかし流域の河岸場集落を訪ねると、ところによってはかつての旅籠屋や町並の面影を集落のどこかに残り、往時の繁栄ぶりを偲ばせるものもある。

以上のような利根川の変貌に伴なう流域の集落や地域社会の変容につき、とくに変化の激しかった明治以後の二、三の主要問題点について、以下検討してみたいと思う。

### 三、中流部における湖沼の干拓

渡良瀬川の合流点から鬼怒川の合流点にいたる中利根の左岸にかけては大小の沼地があった。これらの沼地はます飯沼が享保から天保にかけて干拓され、大山沼は大正一五年に、釈迦沼も大正一五年に、長井戸沼は大正一三年に、鶴戸沼は昭和三〇年、そして一の谷沼は昭和二九年に夫々干拓が行われて水田となり、現在は菅生沼を残すのみとなっている。境から下流の利根川の流路は、往古は以上の沼沢の水を集め広河となって東流する毛野河（鬼怒川）の支川であって、夫より藪沼の一大沼沢地に入り更に東流、藤城河岸付近で手下水即ち手賀沼を合せ、以って毛野河に注いでいたのであった<sup>⑧</sup>。しかるに赤堀川が利根本流となるに及び河床の上昇をみ、とくに天明三年七月の浅間山噴火

による降灰（中利根地方には三寸余も降ったという<sup>⑧</sup>）でいっそう河床の上昇をみたため、これらの沼地の排水はさらに困難となった。元来これらの沼は思川と鬼怒川の河間の排水の水溜ともいべきもので、鬼怒川や利根本流への排水が阻まれていたため、豪雨の際は排水はいっそう困難となり、その周辺は水害に悩まされた。これらの沼のうちまず最初に開発に着手されたのは飯沼であった。

飯沼は真壁台地と猿島台地との間の低湿なやつ田地帯で、仁連川が潤している末端にある排水だまりであった。古くは飯沼とも書かれ広江ともいって鬼怒川に注いでいたが、砂村（水海道）辺で砂に堰かれて沼となった。飯沼辺の村民は古くから藻草、葦、まこもなどを刈取って肥料とし、また漁場に用いていたが、近世前半では留沼とされた。寛文九年（二六六九）、地方村民が開拓を請願したが許されなかった。享保九年（一七二四）、当時の新田開発奨励の気運のうちにあつて、徳川の家臣井沢惣兵衛為永は紀州流治水築堤技術によつて飯沼落し堀を設け利根川に排水、同一三年東仁連川を掘つて鬼怒川に排水した。享保一三年の検地帳は、水田一八九六町余、高一四三三八三石、村数三一、民家八〇〇戸、人数五千口を算している<sup>⑨</sup>。しかし利根川の河床の上昇とともに排水は困難となり、逆流によつて屢々水害を起した。とくに享保一六年の大洪水により仁連川上流の水を長井戸沼に排水しようとしたが、長井戸沼縁辺から反対されて果さなかった。享保一四年、西仁連川を設け排水したが、その後も飯沼新田では水害が絶えなかった。文化文政にいたり代官岸本武大夫父子は第二の工事を起し、水害による戸口減少を喰い止めるべく懸命の努力を重ね、越後国出雲崎にまで出張して入百姓を募り、移転費用をもち、一人五反歩を配当し、時に農具牛馬まで給与した。かへて一八年後には増加一九七戸一三三三人となった。

しかしその後も利根川河床の上昇が著しく、湛水、逆流による冠水害は絶えず、年貢未進も嵩んで村も亡所になる

うとした。天保年間に二宮尊徳が幕府から派遣されたが、その仕法について地元との折合いがつかず果さなかった。さらに慶応三年にいたり逆水防止の請願も出されたが、時機熟さずそのままとなった。明治三十一年三月「飯沼反町水除水害予防組合」ができ、県の認可を得、同八月神田山地先に堤防と自動式鉄扉閘門が予算三九六五四円四〇銭をもつて着工され、同三三年に竣工した。しかしその後も逆水は絶えず、移住する者も相次いだ。大正七年、飯沼村杵掛村は「飯沼耕地整理組合」を設け、同八年にいたり局部的に水害は免れることとなった。昭和八年、飯沼川沿岸農業水利改良事業が起工され、三二〇馬力の排水機場を設け、西仁連川を改修、さらに昭和二四年から東仁連川改修工事も着工され菅生沼に排水する工事が進められた結果、菅生沼は遊水池として残されることになった。

鶴戸沼については嘉永三、四年にかけ関宿藩の家臣船橋随庵が利根川に排水路を開きしたが、その後も水害は絶えなかった。昭和二〇年にいたり排水機場が設けられたが、同二二年の洪水で堤防決潰、二三年より着工し三〇年に完成、自然排水路、用水路と四カ所の機場が設けられた。

長井戸沼は小山付近から南部の野水を集めている長さ六杆、幅一杆、面積三四〇ヘクタール、集水面積九七〇〇ヘクタールの沼であり、この開発計画はすでに近世末においてみられた。この沼の縁辺村であった久能村では「享保八年より宝暦二年迄三十ヶ年間田畑水腐にて引高がされて収穫の反高は田六町三反二畝余、畑四二町三反七畝余で水腐高が田三七町九反八畝余、畑二七町八畝余<sup>⑨</sup>」であった。長井戸沼は下は境町より上は猿島郡の北端に及び、旧一町六カ村を含み、大正のはじめに八七二町余を九七三人および国で持っていた。沼地原野が半ばを占め、漁業採藻の外不生産地であった。かつて境町外六カ村悪水路垣樋水利組合の樋管によって排水してきたが、利根の水位が高くなったので水害が起つたのであった。そこでその縁辺の土地三一九町余所有者四〇七人は大正二年三月に、南北二千四百



図 2 境町および長井戸沼付近 (2 万分 1 迅速測図より)

間、東西二百乃至六百間の測量調査を県に申請、同五年に耕地整理組合を組織して干拓事業を起し、同一三年に竣工した。沼の南に揚水機場を設け、利根川に排水するもので、自然排水路の延長二二軒、沼地排水路の幹線三軒であり、排水の結果九一九ヘクタールの耕地ができた。干拓前は縁辺の農村では畑が多く、麦や陸稲を作り、僅かの谷田を含め一戸当りせいぜい六反程度、沼での鯉、鯛などを釣やふくる網でとる漁業を兼ね、さらに日雇や出稼で補い、境町の商家などと比較し生活程度にも著しい格差があった。干拓後には組合加入者は平均して八反程度の水田を得、新開地は良田となって二毛作にも適することとなって収穫は倍増した。稲尾部落ではかつて三三戸であった戸数は現在六〇戸（うち商店を兼ねるもの五戸）に増大したが、これは耕地面積の増加に伴ないその後の分家によるものであるといわれる。以前畑であったところに植林された場合もあり、それが最近工場敷地に利用されているものもある。またかつての陸稲や麦にかわり蔬菜栽培が始められたところもある。しかし竣工後も中央の約一〇〇ヘクタールは湿地であったので、昭和三八年以来機場をさらに強化する計画が進められている。

境町の南東にあった一ノ谷沼は、地元の要望により排水機場を設け、昭和二九年に干拓されて約七五町歩の水田を得た。縁辺の金岡、浦向、染谷、一ノ谷、百戸、新田戸などの部落の有志二五〇名で土地改良組合を組織し、既耕の水田面積や希望反別を勘案して組合費を徴収した。干拓前は田畑併せ一戸当り約一町二、三反の農家が多かったが、水田面積は少かった。干拓後は一戸当り多くて一町、少くて二反ぐらいの水田を得た。平均して水田が三反程度多くなり、稲のほかに畑はかつての麦作や煙草から蔬菜栽培に転じ、整理された耕地は機械の導入を容易にし、農家の生活程度は著しく向上した。

大山沼も揚水機場を設け大正一五年八月に竣工、三六〇ヘクタールの耕地を造成、釈迦沼も同じく揚水機場を設け

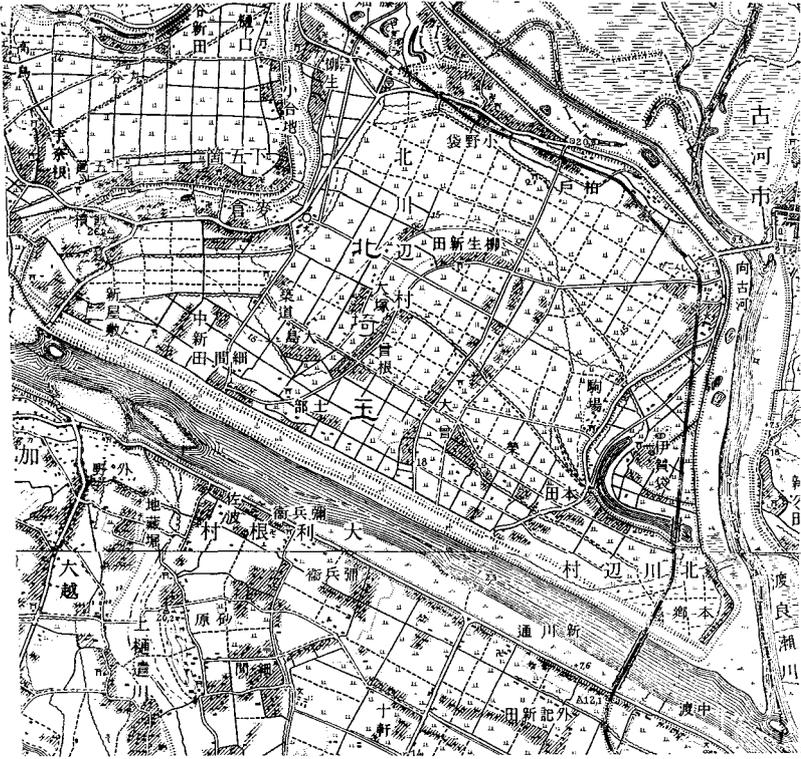


図 3 北川辺村近傍図 (5 万分 1 地形図『古河』『鴻巣』より縮図)

大正一五年八月に竣工し、四二八ヘクタールの耕地を得、縁辺農村の水田面積が増加した。

#### 四、洪水と村落

近世における利根川の瀬替は江戸や武州平野の洪水を防ぐに役立ったが、新しい河道の流域は河身の勾配を失って頻々と洪水をうけることとなった。瀬替が行われた近世前半には比較的少かったが、後半にいたり河床が高まると共に洪水は頻繁に沿岸を襲い始めた。享保一三年(一七二八)、寛保二年(一七四二)、宝暦七年(一七五七)、天明三年(一七八三)、同六年、弘化三年(一八四六)など史上に残る大洪水が目立つ

ている。

利根川本流と渡良瀬川に挟まれ、四囲の堤防は延長約二万米に達するといわれる埼玉県北埼玉郡北川辺村では、縁辺部の飯積、小野袋、伊賀袋や中央の柳生新田からも土師器を出土して、古墳時代前期において既に居住地域となっていたことを示している。面積二〇・九六平方料、一四六五世帯七七八八人（昭和四〇年）の農村であり、全戸数の七割程度が農家である。総耕地面積一一四七町歩、うち田七七五町、畑三七二町であるが、大正一〇年には田六〇〇町、畑六二〇町で畑の方が多かった。村の中央部にあった沼沢地が排水され、土地改良が行われ、さらに昭和三〇年頃から畑の陸田への転換が行われた。一般に周辺の自然堤防が畑となっており、中央部に水田が広がっている。古くは北方郷太田庄の中にあり、延徳二年（一四九〇）石川信濃守源吉が陣屋を構えて三万二千余石を領したといわれ、その後古河領に属した。明治維新に入り埼玉県の所管となり、明治二二年には麦倉、飯積、柳生、小野袋など西部の地区は利島村に、柏戸、向古河、駒場、本郷、栄、伊賀袋などは川辺村となった。そして昭和三〇年四月、両者を合して北川辺村が設けられた。

村の西端に遍照寺山と呼ばれている二六・二米の砂丘が認められるが、この山より東方へ扇状に低くなり、中央の柳生新田から三軒付近では最低の一四米になる。南部は比較的高く、利根川沿いの細間、土部、本郷付近は自然堤防に当りほぼ一六米前後であるが、昭和三二年八月に埋立てられた越中沼は後背湿地の最深部であったと推察される。集落は一般に利根川や渡良瀬川に沿う自然堤防上に密集して設けられているが、新田村の開設にあたっては、これらの古村より中央部の低湿地の中の旧自然堤防の微高地を求めて開拓が行われたと考えられる。利根・渡良瀬両河川は一貫工事として幾度か改修が行われ破堤による水害の防除には成功したが、堤内における湛水害についてはその防除

は困難を極めた。以上のような皿状の地形である北川辺では、一度湛水すれば渡良瀬川の水位の低下を待たねば排水できなかつた。しかも年々高まる河床は湛水時間を漸増し、その被害を増大した。

水害が北川辺を襲い始めたのは寛永元年（一六二四）が最初であり、新川が利根本流となつてからであった。洪水によつて流入した土砂のために耕地を失い、飯積の北高野では遂に一七戸が富士山麓へ逃避したとも伝えられる。堤防の決潰は利根本流、渡良瀬川、それに西部の合ノ川にもみられ、北川辺は四周からの洪水に悩んだ。天明以降昭和二二年までの二二二年間に実に八一回の水害を蒙つたといわれており、明治に入つてからも三年から四三年までの四〇年間に一三回、すなわち三年に一度の割合で水害をうけている。弘化元年以来三年連続で水害に襲われたが、弘化二年には全村床上床下浸水し、弘化三年には浸水余す所なく其の惨害の多大なること名状すべからざる有様であつた<sup>⑨</sup>。昭和二二年九月の洪水の時には向古河の渡良瀬川の堤防が約二〇〇米にわたつて決潰し、全村は一夜の中に濁水の渦と化し、死亡九、床上浸水一四七三、流失全壊一一〇、半壊三三七、牛馬被害六二三、水稻全滅六六一町歩、同じく陸稻八七町、大豆一〇二町、そして桑園一〇八町が三分の一枯死し、教育は一五日間中止されるといふ大被害を蒙つた。

洪水の激しかった北川辺では全戸の一六・六%、農家戸数の二二・六%（一九五六年四月）が水塚をもつており、中央部に位置して冠水の頻度も高く湛水期間の長かつた柳生新田においては、総戸数の四三・二%が所有している<sup>⑩</sup>。一般に土盛の高さは二―五米程度、水塚建物は六坪が普通で二階建が多い。平時には米倉を兼ね、周りに樗や榎を植えて洪水による崩壊を防いでいる。納屋の軒などには今も避難用のアゲ舟を吊している家がみられる。以前は畳の敷いてある家は少く、ウスベリを敷くものが多く、壁も荒壁がほとんどであつた。

洪水に対して地域住民の間で古くから水害予防組合が村の男子で組織されており、組合長は村長であった。耕地の所有面積によって一番から三番までに分け、大体一・五町以上は一番組、一・五町―五反ぐらゐまでは二番組、それ以下（主に小作）は三番組であった。かつて利島村は五区に、川辺村は四区に分れていたが、一番組は各区で三〇人程度で、各区それぞれ堤防を部分的に分担した。増水して洪水の怖れがあるとまず一番組が出て見張りをし、漏水があると土俵を積んで竹でとめた。いよいよ危くなると二番組が出勤して水防作業に当り、いっぽうでは収穫可能なものは急いで片付けた。三番組出勤となるといよいよ全村挙げての体制で、ここまでくると危険度は最高であった。水害の怖れが去ると、二番組以下が水防具を水塚に片付けた。隣接の群馬県域で利根川が決潰すると低い北川辺にも水がくる怖れがあるので、時には遙々応援にかけつけたこともあった。このように流域各町村の組合間の協力もあったのである。河川改修の進まぬ明治四三年以前には一番組出勤は毎年のようにあり、多い時は年に四、五回、二番組は一、二年に一回程度の出勤であった。もちろん出勤はすべて無償奉仕で、地主階級の一番組出勤の回数是最も多いことになる。昭和二二年九月の大水害の際のこの組合の活躍はめざましかった。しかしその後は改修事も進んで出勤の機会もほとんどなくなり、農地改革後は階層格差も縮まって一番から三番の区別もなくなって、今は消防団がその任に当ることになっている。農地改革前における村の大地主は麦倉のK家（今はない）で一五〇町程度の所有であった。村の農家でこのK家の小作を多少とも行っている家はかなりあった。利根川対岸の大越でもN家・I家などの大地主があつて、北川辺の土地を有っていた。水害のあとで土地を抵当にして金を借り、遂に返せなくなつてとりあげられたものであつた。

北川辺のこのような水害は、河川改修工事の進捗と排水機場の設置によって免れることができることになつた。明

治二九年の大洪水を転機として改修工事が急速に進められた。その後起った洪水によって幾度も計画高水量が改められたが、昭和二二年以後、同年の洪水の毎秒一万七千立方メートルを勘案して渡良瀬川の築堤と利根川の引堤が行われた。

しかし洪水の怖れは去っても皿状の地形である北川辺では、依然洪水の怖れは去らなかつた。明治四三年に利根川改修工事が着工され、破堤による水害が根本的に除去されようとするに及び、川辺村民は洪水の防除に百年の計画をたてるべく、単独または普通水利組合においてその具体化に活発な動きをみせるにいたつた。しかし土地が川辺村より高い利島村ではその必要性をさほど痛感せず、利根・渡良瀬両川の改修工事により地区周囲の安全が確立されぬ限り(當時は堤防の拡築は未だ半ばにも達していなかった)、堤内の画期的改善を企図することは愚であるとして反対、いっぽうの川辺村では利島村からの水の流下を拒否して対立した。そこで大地主K氏が両者の間に入って調停を行った結果、大正五年に協定をみた。かくて大正六年に本郷樋管改良工事が竣工、大正九年には犬走堀の開さくが竣工、さらに北川辺領耕地整理組合が誕生し、高低両地の利害相反でそれに伴う経費負担の点で延引したが、大正一年一〇月に排水機場の設置をみた。しかしその後も洪水水害があり、幾度も機場の増設や更新を行つて排水能力の増大を行い、昭和三七年に竣工した。

以上のような河川改修工事や排水機場の設置、排水溝の開さくにより、北川辺では水害や洪水の怖れも去つて、経済は著しく好転した。土地は改良され、水田は増え、農業生産は増大した。米の生産高も大正五年の五一〇九石は、途中水害洪水による減収を除き、上昇の一路を辿り、昭和三〇年には一九三九六石となり、反収は大正五年の八六升から昭和三〇年の二七八升へと上昇した。以前には稲刈りに際し舟を使用し、水中の稲を引っかけて刈りつ

たこともあったが、今は機械化が進み、大型トラクターが二〇台近く導入された。農家経済は安定し、生活程度も向上、教育面では進学率の急速な上昇をみた。そして水塚はもはや新しく設けられることもなく、軒先に吊されたアゲ舟もほこりにまみれ、朽ちるにまかされている。

### 五、河岸集落の変貌

利根川利用の推移に関連して著しい変貌をみた流域の集落のうちには、水運の衰退に伴って変貌をとげた河岸集落がある。もともと水運によって発生したものに、川船問屋や旅籠屋、商店などからなる都市的機能をもつ交通集落であり、水運の衰退はまさに致命的なものであった。江戸時代における河岸場や水運に関してはすでに成果が出されているので、ここでは明治以降、水運の衰退に伴う河岸集落の変貌をいくつかの事例によって述べてみたい。

対岸に関宿の城下町をもち、江戸川への分岐点に位置し、陸上では岩井に至る銚子街道、下妻に至る那珂湊街道、仁連より結城に至る奥州裏街道（結城街道）などの交通の要衝として発展した境（現在は茨城県猿島郡境町）は、天明五年（一七八五）の戸数三五五、役人一六（内往還并河岸問屋二、浜手問屋四、雑穀問屋七、他三）、百姓三八、船持五九、馬持二八、舟乗小場日雇一五六、医者・職人・座頭二七、高瀬船持五九（内問屋一七）、茶屋二一、渡守九、人数一八五一（男一〇六四、女七八七）の河岸集落であった<sup>⑩</sup>。一七〇六年には三〇〇戸であったから、戸数も漸増していたようである。河岸問屋の二軒のうち一軒は青木屋で大口の荷物を、他の一軒は小松原家で小口の荷物をそれぞれ取扱っていた。下り商品（江戸へ輸送されたもの）は蔬菜類をはじめとし、たばこ、穀類、林産物など、それに真綿、綿糸、麻などの工産物の原料品加工品など多く、その出荷地は境町周辺の農村、結城、下妻、栃木、真岡、



写真 1 明治末年頃の境、小松原河岸

そして遠くは福島、会津、米沢、最上などにも及んでいた<sup>⑩</sup>。明和以後屢々洪水に遭って戸数の減少をみ、五〇年間に約二割の減少をみたが、近世末五〇〇戸に達し、明治に入り郡政の中心となって増加の一路を辿った。明治末年には八八七戸、四九五八人の町で、農業九〇、工業七七、商業五九七、その他一二三戸であった<sup>⑪</sup>。

明治に入り回漕問屋は小松原家のみ残り、他に岡田(ムサシヤ)、日の屋、石津などの河岸ができた。各河岸は六〇―七〇米ぐらい離れて設けられ、小松原河岸は現在の堤内一〇〇米くらい先にあり、河岸まで町並が続いていた。明治末年頃には旅館も四軒、大きな家としては回漕店、肥料商(周辺の農村へ供給)、穀屋、糸屋(後背地に機業地があったので)、料理屋兼遊女屋、箱屋(料理屋兼茶屋)などであり、このほか商店が多く、その商圏は大体境周辺二〇―二五軒程度の範囲であった。荷物は東北方面から薪炭類、栃木方面からの麻製品や結城紬など、地元からは麦、雑穀類などが出荷され、東京からは荒物、日用品、肥料、高級衣料などが運ばれた。明治一〇年頃から利根川には蒸気船が航行し始め、内国航船の外輪蒸気通運丸は貨客を輸送し、一日二回、日の屋河岸に着岸した。両国まで約七時間、運賃は二七銭、古川幾郎経営の古川丸と競争した。しかし利根運河の開通によって河岸に着く船は激減した。そして大正のはじめには改修工事によって河岸は

すべて移転せざるを得なくなり、高大な堤防が築かれた。利根川の舟運は昭和一〇年頃までみられたが、昭和七年には小松原家もトラック運送業に転業、ムサシヤも酒屋に転業した。現在は鉄道の沿線より離れ、バス網により古河、杉戸、岩井などと結ばれ、付近農村の中心集落であるが、特に目立った産業もなく、人口は漸減の状態である。

今は加須市の一部となっている利根川べりの大越も、かつては河岸場として繁栄した集落であった。明治二七、八年頃は四二〇〇人程度の人口をもつ、この辺では行田に次ぐ集落であった。川船問屋は三軒あり、黒田河岸、荒木河岸、川圪河岸として繁栄した。流山のみりん、銚子の酒や魚などが運ばれて来、馬車に積み替えて行田、鴻巣、桶川、熊谷などへ運んだ。料亭は一一軒、その他穀屋、肥料屋、雑貨屋、菓子屋などがあった。今は堤内になっている河岸付近には五、六〇軒の家があり、商店も多かったが、多くは半農であった。周辺は養蚕地帯で大越はまゆの集散地であり、屢々市がたつて二〇名を越えるまゆの仲買商が住み、大地主のI家もこのまゆや蚕種商で産をなしたものであった。また加須、羽生を中心として盛んであった青織もさかんに織られ、足袋屋と共に夫々一〇軒程度もあった。明治以降大正にいたる改修工事により高い堤防が構築され、土地約一三〇町が堤内となったため、河岸場の家はすべて堤外に移転を余儀なくされ現在の大越の中心集落を形成した。昭和に入り舟運の衰退と共に川船問屋は農家となり、料亭経営者はサラリーマンに転業、商店経営者もまたサラリーマンに転身した。人口も減って一農業集落になった現在の大越には、かつての河岸場としての繁栄を語るものは何一つ見当らない。

竹袋より利根に木を下したことからその名が出たといわれる木下河岸（現在は千葉県印旛郡印西町木下）は、利根川図志によるとはじめは僅か一〇軒であったが、寛文の頃から行舟（木下茶船）が設けられてよりその繁栄が始まり、三社詣り（香取・鹿島・息栖）と銚子浦の遊覧客によって賑わったといわれ、これは明治三四年の成田線開通ま

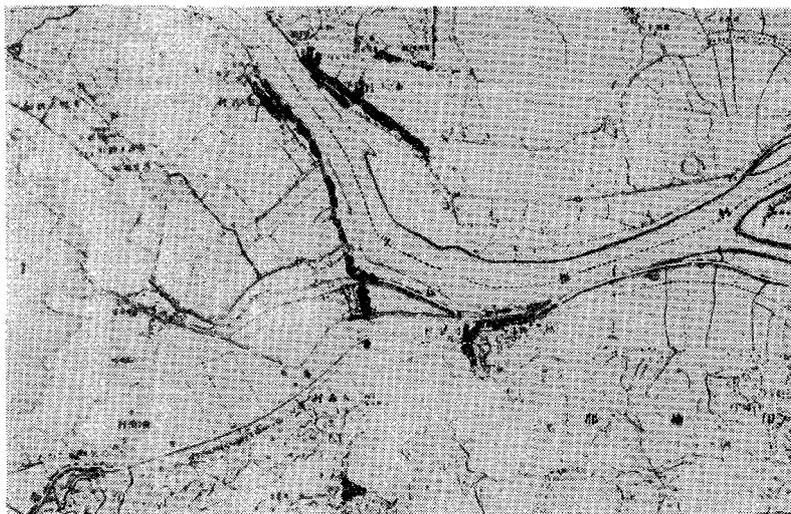


図4 木下河岸付近（2万分1迅速測図より）

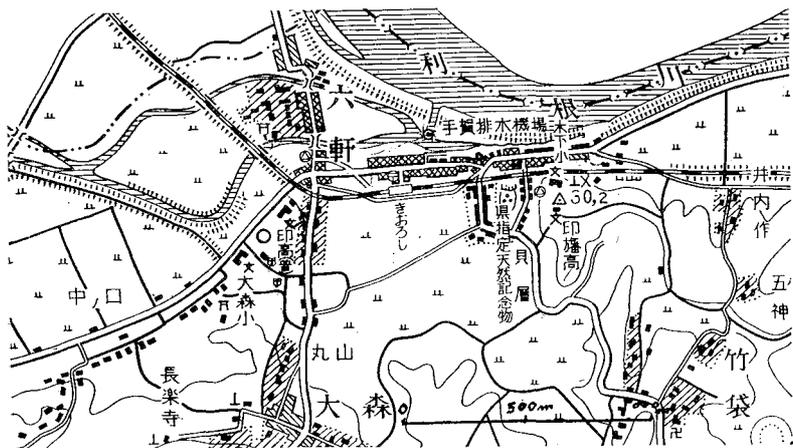


図5 昭和38年頃の木下町付近 現在は駅前と六軒の間は町並が続いている。

で続いた。三〇  
 米の台地の末端  
 が背後に迫り、  
 利根川の堤防に  
 沿うて成田に至  
 る街道に面し町  
 並が続き、台地  
 と町並の間を成  
 田線が走ってい  
 る。木下の町並  
 は東に延びて目  
 貫通りとなり、  
 木下駅前を過ぎ  
 て間もなく六軒  
 にいたる。六軒  
 は木下町では現  
 在、商業活動の

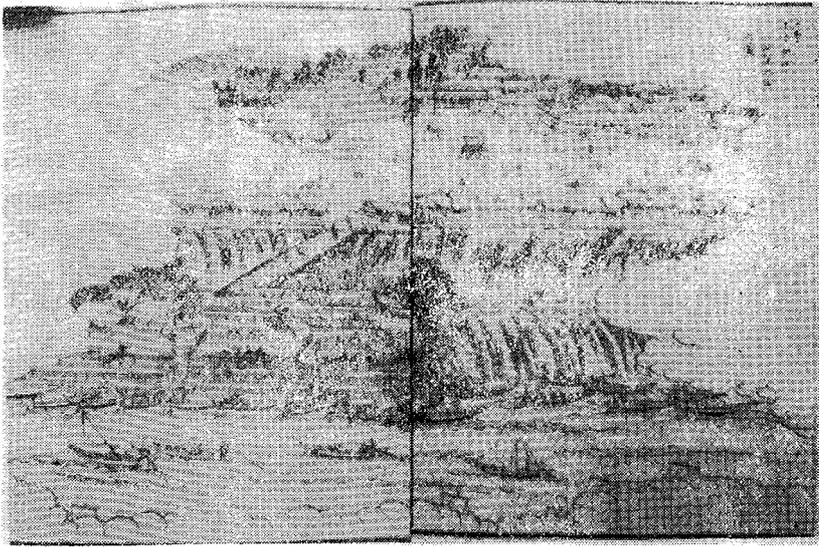


写真 2 木下河岸（利根川図志による）

最も盛んな地区である。布佐に向う街道に面し商店が並び、利根川堤防との間に手賀沼の排水路となっている手賀沼落堀（東端は内川ともよばれ、六軒近くで弁天堀と六軒堀の二つに分れる）がある。この堀は木下駅の北で再び合するが、第二次大戦後、手賀沼沿岸の洪水防止と干拓の目的をもって此処に排水機場が設けられ、昭和三年に竣工した。この排水機場ができるまでは手賀沼落堀は木下集落の北を流れ、その東端付近で杵樋が設けられて利根川に結ばれていた。機場設置後は、機場付近よりかつての杵樋に至る間の堀は不要となり、最近埋立てられた。利根川図志に掲載されている木下河岸の図ではこの堀に橋が架けられ、現在の堤防の内側にあたるところに河岸が設けられて旅籠屋や茶店が並んでいた。河岸に並ぶ沢山の船は三社詣りの行舟である。背後の川船問屋は寛文年中設立の「惣兵衛」で、現在もこの位置にあるY家（当主は東京で開業医）である。

木下のこのような繁栄の基盤には、利根川流域から陸路江戸への最短距離にあるという地理的位置の良さがある。木下

河岸から今の木下駅の南を通り、大森、鎌谷、行徳を経て江戸にいたる。水運で利根川を遡行して木下まで運ばれた貨物は陸揚げされ、陸路を小荷駄で江戸へ運ばれた。魚も多量に運ばれて俗に生街道なまとも呼ばれた。三社詣りの基点としても、この点甚だ便利であったと考えられる。また印旛沼の渡しを通り佐倉に至る陸路も重要であったようである。明和九年（一七七二）の戸数一九三、人口七〇八、宝暦一〇年には二〇〇戸六〇〇人であった。そして茶船二〇艘、小船一二艘であったが<sup>㊤</sup>、この茶船の多いところに木下の特色があった。かくて寛政元年（一七八九）ごろには年平均四二〇〇艘の舟が出入した<sup>㊦</sup>といわれる。

明治に入り、Y家でも七〇屯くらいの外輪蒸気を購入して銚子―東京間を運航させた。明治四一年には木下河岸の乗客三八九二（うち降客二八六六）、貨物は一二二三七個（うち到着七七六三）であった<sup>㊧</sup>。壬申戸籍に載っている当時の木下河岸を含む竹袋村の戸数は三一四であるが、うち農業は一〇六、船乗二〇、旅籠一〇、水菓子職一二、日雇稼一八が主で、商店や加工業などがその他を占めている。三社詣りは成田鉄道の開通で衰退したが、舟運は昭和の初めまで続けられていた。しかし、河岸集落としての機能を大きく変えたのは、明治四二年の利根川改修工事による堤防の構築であった。河岸には一〇軒程度の旅籠屋、料亭、飲食店などがあり、内川の橋を越え、成田街道に面して問屋や旅館、商店や船頭の住家などがたち並んでいた。改修工事によりこの河岸の部分が移転を余儀なくされ、大正のはじめには利根川図志の図にみられる「かべなしや」「三角屋」などの旅館も転業し、駅付近へ移転した。

六軒にあった大森河岸は古くは木下河岸程でないにしても、やはり小さな河岸としての機能を持ち、河岸近くには回漕店や船頭の住家もたち並んでいたが、この河岸の機能としては、いっぽうにおいて手賀沼落堀を通じ手賀沼の水運に関連していたようである。手賀沼沿岸の村々からは米、材木、薪などが小さなサツパ舟で六軒へ運ばれてきた。

明治三四年に成田鉄道が敷設されると木下駅の設置場所が問題となり、当初は井ノ内（現在の木下駅より成田寄り約一軒くらいのところ）で、木下河岸に最も近いところ）に設置の予定であったが、地元民の「汽車の火の粉がとんで危険だ」とか、「木下が衰微する」とかの理由による反対にあい、木下集落と六軒集落の間の桑畑の中に設けられた。そしてこの桑畑の中を両部落から木下駅へ通じる道路に面し、木下河岸からの移転者や六軒からの移転者などが移り住み、やがて木下と六軒とが連続して町並を形成するようになり、現在の駅前の目貫通りができた。河岸廃止後の木下集落の衰微は著しく、やがて背後の農村地帯を通り佐倉、臼井、船橋、中山などと木下駅を結ぶバス路線がコースの関係で六軒集落を通るようになってからは、商店街の主力はむしろ六軒に移ってしまった。

この他の河岸集落も、多かれ少かれ似たコースを辿ったようである。中仙道に沿う本庄宿の外港として、また中請河岸（積替地点）として繁栄した山王堂は伊勢崎銘仙の機屋部落として特色をもつようになった<sup>②</sup>。また利根川図志に記載されている小堀（おほり取手町小堀）河岸は船頭部落として知られていたが、現在は通勤者と出稼者の集落に変わってしまった。

## むすび

以上、利根川流域における集落を概観し、そのさまざまな問題点について考察してきたが、その地理学的問題点の基本はやはり、集落住民の「水との斗い」、「水の利用」ということであろう。毎年のように襲う洪水と斗い、沼地や湿地を干拓し、湿地を改良することによって生活の基盤を築いてきたのである。河にへばりつくようにして形成された河岸集落も、度重なる洪水に襲われ、あるいは流され、あるいは破壊されたが、水が去ると再び修理され、建て直

されて河岸の生活が続けられた。何もかもすべて利根川とその水に依存する生活であった。

明治以後のわが国における政治経済の動きと科学技術の進歩は、この「水との斗い」と「水の利用」を大きく変えた。頻々として水害や湛水害に悩まされ続けた干拓地や湿地地域では、大正以後の排水機場の設置と河川改修工事によってその悩みから解放されることになった。そして新しい灌漑用水の整備とあいまって耕地は増加し、農業生産は増大した。しかしいっぽう、江戸の発達に關連して関八州の動脈としてさかんに利用された水運は、陸上交通の発達によって衰微し、河岸集落の変貌を惹き起した。

最近にいたり利根川の水はまた新しい利用に供されることになった。すなわち都市用水と工業用水であり、その利用は東京から京葉工業地帯にまで広がりがつつある。そして利根川流域の集落を現在変貌せしめつつある今までにない新しい大きな力は、東京の巨大化と京浜工業地帯の過密化の著しい影響である。この新しい波は鉄道幹線に沿い、あるいは幹線道路に沿って急速に進み、沿線の都市や村落を大きく変貌せしめつつある。

利根川流域の集落に関しては、このような最近の新しい変貌に關するものを含め、以上のほかまだ多くの問題があると考えられる。しかし与えられた紙数を遙かに超えたので、これらについてはまた別の機会にゆずりたい。なおこの調査は昭和四一、二年度の文部省科学研究費によるものである。

#### 注

- ① 多田文男「自然環境の変貌」昭三九  
 ② 利根川河道の変遷については、前掲「自然環境の変貌」、栗原良輔「利根川治水史」(昭一八)、磯崎優「利根川の水運」(地

- 理学」七卷一号)、河野通博「利根川の水運」(現代地理講座5)などを参照されたい。
- ③ 「関東地方災害年表」(利根川荒川洪水予報連絡会 昭三九)
- ④ 磯崎優「利根川の水運」(「地理学」七卷一—三号)
- ⑤ 岡本兼佳「関東低地における散村の成立と微地形—古利根・江戸両川の河間低地において—」(「人文地理」七卷三号)、  
「関東低地散村地域の自然的構造と居住機構」(「地理学評論」二七卷三号)
- ⑥ 菊地利夫「利根川下流地帯の開発」(「人類科学」二〇号 九学会連合)
- ⑦ 岡本前掲論文(「人文地理」)
- ⑧ 山鹿誠次「関東地方の地方都市」(「日本地誌ゼミナール」Ⅲ)
- ⑨ 栗原良輔「利根川治水史」(昭一八)
- ⑩ 今井隆助「猿島の郷土史」(昭四〇)
- ⑪ 今井前掲書
- ⑫ 今井前掲書
- ⑬ 大体旧利根川の河道である現在の江戸川の河身の勾配が一里で二尺の落差があるに對し、栗橋より下流の現在の利根川においてはその落差が一〇里で僅かに一尺にもみたぬという。(「北川辺領土地改良史」による)
- ⑭ 北川辺史談会編「北川辺史の研究」第一卷(昭三五)
- ⑮ 佐藤甚次郎「利根川流域の水塚について」(「新地理」一一卷一号)
- ⑯ 前掲「猿島の郷土史」
- ⑰ 田畑勉「河川運輸による江戸地廻り経済の展開」(「史苑」二六卷一号)
- ⑱ 境町沿革小誌編纂会「境町沿革小誌」(明四四)
- ⑲ 岩瀬和博「近世利根川水運における木下河岸」(「房総地理」一八号)
- ⑳ 地方史研究協議会編「日本産業史大系—関東地方篇」
- ㉑ 「千葉県印旛郡誌」後篇(大二)
- ㉒ 拙稿「機業圏の地理的基底」(「史苑」二二卷二号)